

連合徳島青年委員会 2022年度 春季学習研修会 受講レポート

[報告者：連合徳島青年委員会委員長 小畑 文人（四国電力総連）]

研修内容：「障がいのある人とのパートナーシップでつくるダイバーシティの推進とSDGsの取り組み」

日 時：2022年3月24日（木） 18:30～20:30

場 所：特定非営利活動(NPO)法人「C r e e r(クレエール)」(徳島市万代町5丁目71-4)

講 師：NPO法人クレエール 喜多條 雅子 理事

- NPO法人「クレエール」はスペイン語で「信じる」という意味のとおり、障がいのある人が社会の中で自立して働くチャンスを得て、お客さま、地域の人に喜ばれる仕事ができるという可能性を信じて共に努力を続ける、という信念の元、2008年7月に設立されました。
- 「クレエール」の理念・ミッションは、『障がい（身体・知的・精神・難病）のある人が、自らの可能性に挑戦し、社会の中で誇りを持って働き、経済的に自立できる賃金を得て、幸せに暮らせる場所をつくること』であり、就労系事業所B型（雇用契約を結ばず作業分の工賃が支払われ、期限の縛りがない）の形式を取りながら、障がいのある人の就労の場として、お弁当製造販売を中心にレストランを運営するほか、IT、縫製、手工芸、芸術、スポーツ活動、地域交流事業などに取り組んでいます。
- 喜多條さんは、障がいのある人は、その特性から、社会の中で自立していくためには、一定のサポートが必要であるが、残念ながら、行政・福祉・公的サービスのみでは十分に行き届いておらず、また、そのような状況が広く一般にも浸透していないのが現状であると指摘します。
（「容易に社会の中からこぼれ落ちる存在となり得る」という言葉が印象に残りました）
事業を通じて、障がいのある人に寄り添いながら、そのギャップを埋めるための環境づくり等を目指し、日々、懸命な活動を継続されています。
- 喜多條さんが「クレエール」を立ち上げるまでには、母子家庭で育ち、幼いころから様々な生活のご苦労をされたことを原体験として、高校でのボランティア体験・資格取得等で世界に視野を広げた後、信託銀行での勤務経験で事業を継続していく中でのお金の大切さや経営の原点を学び、国際的NPO組織「スペシャルオリンピックス」日本での15年間のボランティア活動を通じた様々な人や組織等との出会いが繋がり、ベースとなっているとのこと。
- その経緯をお伺いする中で、私個人の感覚として、喜多條さんは、人生の分岐点に立った時、必ず「チャレンジする」側の選択をされてきたのだなということ、人や機会との「縁」をととても大切にされてきたのだなということ、それと「1人1人と真摯に丁寧に向き合う姿勢、リアリティを持ったシビアな金銭感覚、アンテナを高くして情報感度を高め、チャンスを見逃さずにアクションに移すセンス、努力を継続する粘り強さとバイタリティー」などが強く印象に残っています。
- 喜多條さんは、障がいのある人が働いて自立していくためには、ただ理想を語るだけではなく、一般の市場の中で勝負できる商品・サービスを提供し、しっかりと賃金も支払いつつ、かつ、採算ベースで成立している事業を育て、継続・発展していかなければいけない、また、その活動を続けていく中で、携わる人の個々の特性を理解しながら、生きていく力を育てていくことが重要であると力強く訴えておられました。

○そういった努力の積み重ねにより、就労系事業所のカテゴリーでは、他県の平均等に大きく水をあげ、破格の条件 [さて、どれぐらいの金額でしょうか?] を達成しているものの、一般の就労者の水準には遠く及ばず、まだまだ道半ばであると喜多條さんは仰っておりました。

○喜多條さんは、お弁当製造販売から新たな事業展開を進めていく中で、2018年に「子ども食堂」の事業を開始します。

子どもに対しては無料で食事を提供し、ご家族やスタッフ・ボランティアの方等と触れ合いながら、子どもが安心して過ごせて、社会との接点ができ、人間らしい生活と学ぶ権利が守られる、『子供の居場所づくり』の社会貢献の視点が、同事業には色濃く反映されています。

手作り感のある、温かい雰囲気の中で、地産地消の食材にこだわり、スーパーや生産者から賞味期限の近づいた食品や規格外の野菜等の提供を受け、材料として活用することでフードロスの削減にもつながります。

来所される方はもちろん、運営に携わるスタッフや様々な立場・年代のボランティアの方なども含め、みんなが幸せになる素晴らしい取り組みであるという当事者の声が多く聞かれています。

毎月第4土曜日には、楽しいイベントも開催されており、ボランティアの募集も随時なされているとのことです。ぜひ、1度、参加してみたいなと思いました。

○そして2020年には、「子ども食堂宅食便」の事業を開始します。

「子ども食堂」に来たくても来所することができない家庭を実際に訪問することで、そのニーズに応えようとするものですが、初日から困窮する家庭の様々な問題に直面することになります。

ただ、始めは訪問しても居留守が使われたり、そっけない対応をされることもあったそうですが、フェイス to フェイスの対話を継続していくことで、多くの信頼を得るに至り、そのことにやりがいを感じるといった声も多く聞かれているとのことです。

○「クレエール子ども食堂」は、そういった取り組みが高く評価され、日本財団『子どもの第三の居場所助成事業』に選ばれ、更に多くの人や団体、地域と関わりながら、「誰一人取り残されない地域子育てコミュニティ」をつくることで、「みんなが、みんなの子どもを育てる社会」を目指し、2021年10月より更にステップアップした活動を展開していくとのことです。

(日本財団のホームページ等でも、詳しく紹介されていますので、ぜひ覗いてみてください)

非常にまとまりのない文面とはなりましたが、この度、貴重な学びの機会を与えてくださった喜多條さんに、感謝の気持ちをお伝えすると共に、この学びを周囲に伝えていくことと、そして、クレエールの活動に協賛の意を示し、連合徳島青年委員会として、より一層の連携を図っていくことをお約束して、結びの言葉といたします。本当にありがとうございました。共に歩んでいきましょう！